

Japan InfoMAB

2003.3.10

News Letter on MAB Activities in Japan No.30

日本MAB国内委員会 2002年活動報告

岩 楓 邦 男

2002年におけるユネスコ・MAB 計画の日本における活動状況は、以下の通りであった。

日本政府の信託基金による事業

日本政府から信託基金として出資されている資金を中核に計画されている国際会議が2つある。そのうちの1つが外務省の信託基金による ASPACO で、その第3回ワークショップが10月に沖縄で開催された。この会議は国連大学、ISME, ITTO の協力を受けて、主題の沿岸域生態学のワークショップに加え、国連の年度計画に合わせてエコツーリズムに関するセッションも加えられた。ASPACO は5年に限った計画であり、その成果をどうまとめるかについて、2003年1月末に東京で打ち合わせ会が開かれる予定である。(ASPACO の経緯などについては、本ニュースレターで詳細に紹介されている)

もう1つは文科省の信託基金による 地域セミナー “ECOTONE” で、このセミナーは2001年10月に第10回目の会合をハノイで開かれ、これまで10回のセミナーの総括も行なった。5月にはその報告書 *Ecosystem Valuation -- for Assessing Functions Goods and Services of Coastal Ecosystems in Southeast Asia* が刊行された。合計10回にわたる 地域セミナー “ECOTONE” の活動は、東アジア、東南アジア域におけるこの分野の研究者の組織化に貢献し、今後の情報交流に大きな寄与をしてきたことは高く評価される。そのことを踏まえ、このハノイ会議でも、ECOTONE を今後に向けてどう展開するかが話題となつたが、2002年3月に日本MAB国内委員会と Jakarta Office との間で詰められた文科省信託基金の評価の合同会議

においても、この基金に基づく事業の将来の在り方について率直な議論が交わされた。それらの検討を踏まえ、地域セミナー “ECOTONE” は、これまで集中的に論議してきた沿岸域から少し川をさかのぼって淡水域も含め、将来はさらに川を上流へ詰め、森林の問題も検討する方向で、Phase II に展開することで合意された。実際、今年度の会合をカンボジヤのトンレサップ湖を主対象に、2003年3月にプノンペンで開催することで準備が進んでいる。

MAB の活動に対する貢献

日本は改選された国際調整理事会の理事国に再選されており、さらに3月に開催された ICC の会合で、アジア太平洋域を代表する bureau member にも選出された。

3月にパリのユネスコ本部で開催された国際調整理事会総会には淡路剛久委員、ユネスコ常駐代表部の大谷圭介一等書記官、文科省国際統括官付井村隆ユネスコ第三係長と岩楓が事務局の協力を得て参加し、当面する問題に対応した。ビューローの会合は11月にパリで開かれ、岩楓が出席し、生物圏保存地域の新規申請の査定など必要な業務に対応した。

この他、MAB 事務局と日本MAB国内委員会の意見交換など、交流の機会が度々あり、MAB 全体の活動に参画することによって、日本MAB国内委員会が貢献する機会を増やす努力も重ねてきた。ASPACO III にエコツーリズムに関するセッションを設けたり、ユネスコ関係のいくつかのイベントに参画したのも、多くはこれらの意見交換を通じての協力である。

きの航空便はすでに出発した後だった。空港で「次のサモア行きに便はいつですか」と問い合わせたら「11月8日午前5時5分」ということであった。UNESCO アピア事務所の指示で「オークランド空港でサモア行きの航空券を受け取りなさい」と言うことなので、航空券を受け取りたいと話をしたら「確かに予約はされているが、まだ UNESCO アピア事務所が入金をしていないので、今、航空券は渡せない」と言われた。サモア行きの航空券は受け取れなかつたけれども、ホテルに着いてからサモアに電話すればどうにかなるだろうと、用もない空港を後にしテバスでダウンタウンに向かった。オークランド市内のホテルに2泊することになったが、風邪をひいた状態で日本を出発し、微熱のある状態でオークランドに着いたので、2日間は神様がくれた休養日と考えることにした。

11月8日は午前2時にオークランド空港に行った。アピア行きの航空券を持っていないのであるから、その受け取りを交渉しなくてはいけない。空港カウンターで航空券の受け取り交渉をした。30 分程待たされたがどうにか航空券は入手でき、窓際を予約した。飛行機はほぼ定刻通りオークランドを出発したが、トンガ経由であった。飛行機のキャビンは片側3席、私は窓際であったが、隣は相撲取りの武藏山みたいな人で、その隣もやはり武藏山のような人であった。このままアピアまで2人の武藏山と一緒にだったらどうしようと思っていたら、飛行機に乗っていた武藏山や小錦みたいな人達はほぼ全員トンガで降りたので、本当にほつとした。

2) 実りある会議

第2回のワークショップは 2001 年 11 月 7~10 日であった。プログラムと参加者は有賀先生の報告を参照ください。

アピアでの ASPACO の会議は UNDP/GEF が資金拠出し South Pacific Regional Environmental Programme (SPREP)が事業を実施している South Pacific Biodiversity Conservation Programme (SPBCP)の最終評価会議と同時に開催された。この SPBCP は 10 年間継続して実施されてきた事業であり、その成果は ASPACO の事業展開にとっても、またここ 20 年間太平洋地域で実績のない UNESCO-MAB にとっても貴重で有用な資料や情報を得る絶好の機会ということになる。なお、SPREP は太平洋地域の 22 の開発途上国が参加している環境問題に関するプログラムであり、サモアのアピアに情報センターが

設置されている。したがって、ASPACEO が太平洋島嶼諸国とのネットワーク作りを視野に入れるのであれば、この SPREP のネットワークと協力することが、より効率的に太平洋地域で事業が展開できるということになる。

会議の参加者全員の総意として確認されたことを要約すると次のようになる。

- 生物の多様性の保全と天然資源の管理のために UNESCO が推進している生物圏保存地域の指定は太平洋島嶼諸国にとっても有意義であることから、アジアやその他の地域での事例に学び太平洋地域でも生物圏保存地域の指定を積極的に推進すること
- 太平洋地域における生物多様性の保全と天然資源の管理に関する SPREP をはじめとするその他の機関とのパートナーシップ作りを促進すること
- 現在推進されている SPBCP、UNDP、SPREP の事業などと生物多様性の保全と天然資源の管理に関して今後とも話し合いを継続すること
- これまで知られることの少なかった太平洋島嶼諸国特有の文化、社会的並びに環境的な価値、慣習等の国際的な理解を促進すること
- 今回のアピアでの ASPACO 会議の一つの成果としてパイロットサイトの設置をめざすこと
- 太平洋地域の生物多様性の保全と天然資源の管理について国際的・地域的な機関との間での情報交換を促進すること
- UNESCO やそのパートナーは太平洋地域での生物多様性の保全と天然資源の管理に関する事業資金の拠出先を探すこと
- UNESCO とりわけ UNESCO アピア事務所は定期的に情報提供し、太平洋地域での UNESCO-MAB の拠点作りにつとめること
- 近い将来を目指して太平洋島嶼諸国間 UNESCO-MAB ネットワークの形成に努力すること

以上のように他の地域に比較して、これまで UNESCO-MAB は太平洋地域での活動が十分でなかつたことから、今回のアピアでの ASPACO 会議では、SPREP の協力もあり UNESCO-MAB の拠点形成の可能性を見出せたことなどから、20 年間の空白を埋める上で極めて有意義な会議であったといえよう。

参加者全員が極めて熱心で積極的であり 11 月 7~9 日の3日間の会議は朝の8時30分から始まり、午後5時になつても終了する事なく、楽しくもあったがハードな会議であった。会議期間中の息抜きは 11 月 8 日の夜にキタノツシタラホテルで開催されたカクテルパーティーであった。サモアに来たら昔小学校唱歌(?)にあった「青い青い海だよ・サモアの島、常夏だよ・(?)」の歌を聴いてみたいと思っていた。リクエストもしないうちに、パーティー会場で演奏をしてくれていた若者達のバンドがこの歌を演奏してくれた。それを聞いた途端、会議のこと

はすっかり忘れてサモア人の気分になった。

3日間のハードな会議が終了した翌日の11月10日はサアナプ・サタオア保全地区へのエクスカーションであった。サアナプ村に到着すると、カヴァの儀式で歓迎された。マングローブ林内に新設された木道を散策し、伝統的な小舟によるカヤッキングを楽しんだ(写真4, 5)。参加者全員は次々とカヤッキングを楽しんだが、日本ユネスコ国内委員会の有賀祐勝先生が乗った時だけは、どうしたことか小舟が沈没した。有賀先生は濡れたが、幸いなことに持つておられたカメラは無事であった。

有賀先生と一緒にさせて戴き海岸に面した小さな木作りのレストランの2階でワインを片手に海に沈む夕日を眺めいたら、すっかりサモアの人になりきってしまい、日本に帰るのを忘れそうになった。

3 沖縄での第3回会議

第3回の会議は当初東京で開催する予定であったが、東京では手足となって動いてくれる学生が時期的に確保できないことから、最終的に沖縄で開催することになった。UNESCO は世界遺産に登録されている屋久島での開催も考えていたが、屋久島へは航空賃が高いのとアクセスがあまり良くないので、今回は屋久島での開催を諦めた。沖縄での開催は費用の節約と琉球大学の協力により、琉球大学の大学会館を廉価で借用できることになった。琉球大学会館は会議に出席する人数からみて適當な広さであり、眺めもよく、十分な設備も整っていたことから、大学のご厚意には感謝したい。

沖縄で会議を開催する時は、いつも廉価のホテルを予約する。しかし、今回は修学旅行シーズンで適當な値段のホテルが full-booking、結局廉価のホテルを予約することができなかった。したがって、最終的には UNESCO の了解を取り付け、海に面した高級リゾートホテルを予約した。ホテルの宿泊料金は、私たちがいつも使うホテルの 1.5 倍の 18,000 円(朝食付き税抜き)であった。室内プール付きの高級リゾートホテルであったためか、ホテルのサービスについて、今回の参加者は誰一人、私に苦情を言わなかった。

会議は10月2日～10月4日に開催された。会議のプログラムは表6に掲げた。また、主な出席者は表7の通りである。今回の会議では welcome address と opening address を琉球大学森田孟進学長、文部科学省国際統

括官補佐浅井孝司氏に賜った。

これまでの会議にも増して種々の発言があり充実内容の会議であった。また、近年は沖縄県、特に西表島などのエコツーリズムが盛んとなっていることもあり、会議の最終日(10月4日)には UNU が中心となったエコツーリズムのセッションを設け、沖縄やフィリピンの事例が報告された。会議の終了直後にさよならパーティーを開催したが、琉球大学森田孟進学長のご厚意により沖縄の伝統舞踊が紹介され、参加者全員琉球舞踊を楽しんだ(写真6)。

4 山原(やんばる)へのエクスカーション

会議が無事終了した翌日の10月5日に沖縄島北部、通称山原(やんばる)にエクスカーションに出かけた。海洋博覧会記念公園熱帯ドリームセンター、イタジイが優占種である亜熱帯常緑広葉樹林、それに慶佐次川のマングローブ林を訪ねた。朝8時半にホテルを出発し、途中景勝地である万座毛に寄り記念撮影をし、海洋記念博覧会記念公園の熱帯ドリームセンターでラン展示を楽しんだ。沖縄では一般的のレストランは豚肉料理が主体だが、参加者の中には豚を食べられない方々もいるので昼食をどこでとるか迷った。最終的には日本航空系列の奥間リゾートホテルのレストランでの食事をとした。昼食が一人 1,500 円もするので、有料であれば食べない参加者もいるのではと考え、ISME がその費用を負担した。

山原への案内には昔山原の森林組合に勤務していた佐藤克彦氏をお願いした。佐藤氏は林道の途中でバスを止め、山原が直面する問題点や自然保護等について詳しく説明してくれた。慶佐次川では河岸に設置された木道を通りマングローブ林を散策後、午後6時に無事ホテルに帰り着いた(写真7, 8)。

ASPACO の今後の予定

ASPACO をこれからどのように展開するのかの会議を2003年1月に予定している。参加者は日本ユネスコ国内委員会、UNESCO-MAB、UNESCO ジャカルタ事務所、UNESCO アピア事務所、UNESCO 北京事務所をはじめとし、ASPACO プロジェクトの開始から協力させて戴いている UNU、ISME なども参加する予定である。その会議で ASPACO の最終的な方向づけを行い、どのようにプログラムを終了し、終了後はどのように発展させるのかを議論するのではないかと思っている。

ASPACO はアジアと太平洋地域の沿岸生態系の保全とそのための人材育成も目指したプロジェクトである。ASPACO とは直接的には関係はないが、2003 年5月に沖縄で太平洋島嶼諸国の首脳会議(太平洋・島サミット)の開催が予定されている。わが国がこの太平洋・島サミットのホスト国なので、太平洋島嶼諸国の沿岸生態系の保全や持続可能な利用とそのための人材育成になんらかのイニシアティブを発揮するのではと期待している。その時には、もしかして、わが国が資金を拠出している ASPACO プロジェクトが継続することになるかもしれない。地球温暖化によって引き起こされる海面上昇の脅威に曝されている島嶼諸国の海岸侵食防止、国土の保全とそれに必要とされる人材の育成については早急に取り組まなければならない緊急課題の一つである。2003 年5月の沖縄での太平洋・島サミットの結論がどうあれ、また ASPACO プロジェクトの今後がどのような方向であっても、私がボランティアで事務局長をしている国際マングローブ生態系協会は決して人的にも資金的にも恵まれていいとはいえないが、必要なお手伝いは厭わないでいつでも声をかけて戴きたい。

地球温暖による海面上昇の直接的な影響を強く受けるのは太平洋やインド洋そしてカリブ海などに点在する島嶼諸国である。私どもの協会の事務所のある沖縄も島嶼諸国と同じ問題に直面しているので、これまで以上に緊密に太平洋島嶼諸国との協力をと思っている。

文献

- UNESCO, 2001. Report on the first Meeting of Asia Pacific Co-operation for the Sustainable Use of Renewable Natural Resources in Biosphere Reserves and Similarly Managed Areas (ASPACO). 16 pp. UNESCO.
- UNESCO, 2002. The Second Meeting of ASPACO, People and Places; Pacific island approaches to integrated coastal conservation and sustainable human development. 94+11 pp. UNESCO.

(ばば としゆき 琉球大学農学部・国際マングローブ生態系協会事務局長／〒903-0129 沖縄県西原町千原1番地、mangrove@ii-okinawa.ne.jp)

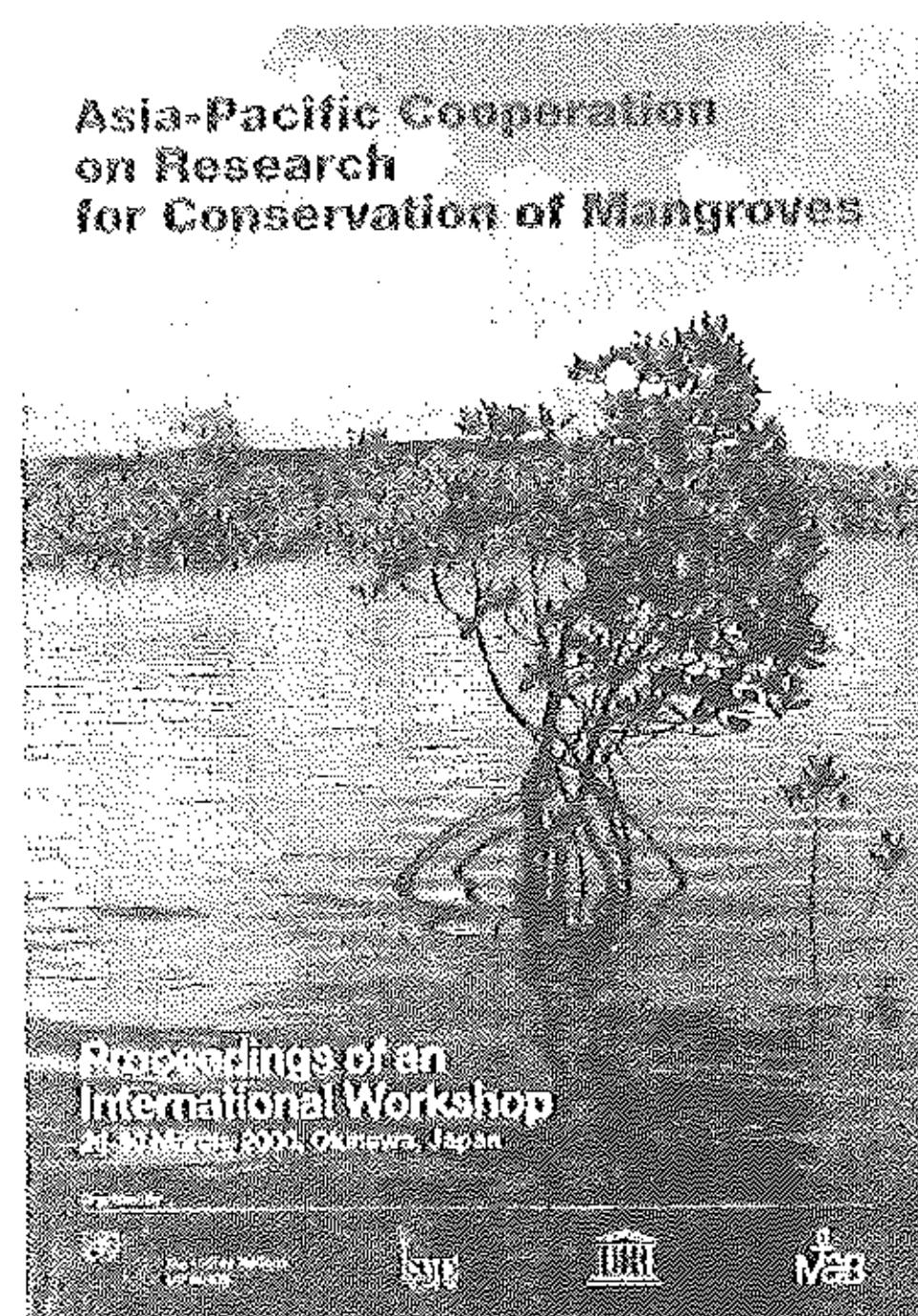


写真1
UNESCO/UNU/ISME が 2000 年 3 月に沖縄で開催した国際会議のプロシーディングの表紙



写真2 バリでの第1回会議時のエクスカーションの様子 (UNESCO, 2001 より引用)



写真3 JICA がプロジェクトを実施していた初期のエビ養殖池放棄地での試験風景



写真4 サアナプ村 (サモア) のマングローブ林の木道



写真5 サアナプ村（サモア）でのカヤッキング



写真6 沖縄での第3回会議での琉球舞踊

第7回東アジア生物圏保存地域ネットワーク会議(EABRN-7)

2001年9月6-13日
ウラジオストク及びシホテ・アリン生物圏保存地域(ロシア)

有賀 祐 勝

標記会議はロシアMABの世話によりロシア極東地区で開催された。ロシアには24の生物圏保存地域があり、そのうち唯一の海洋保存地域を含む6地域が東方にある。会議はウラジオストクと北東部のスミチカ科学実習場で行われ、シホテ・アリン生物圏保存地域の現地視察と評価に関する討論が行われた。韓国、日本、北朝鮮、モンゴル、ロシアの5カ国及びユネスコのジャカルタ事務所、北京事務所、モスクワ事務所から合計56名が参加した（中国代表はビザ発給が遅れのため欠席）。本会議では、「東アジア生物圏保存地域の持続的管理のための能力強化 Capacity Building for Sustainable Management of East Asian Biosphere Reserves」を中心テーマとして研究発表と話題提供並びに討論が行われた。シホテ・アリン生物圏保存地域については、同地域の保護の現状と学術研究に関する説明を受けると共に管理に関する意見交換と討議並びに評価が行われた。日本から有賀が参加した。主な発表のタイトル等は次のとおりである。

9月6日:

開会式

Han Qunli (UNESCO/Jakarta): 生物圏保存地域における Capacity building と研修、並びに国内・国際レ

ベルの研修プログラム

Yu. N. Zhuravlev: Richness of biodiversity of Russian Far East and its protection ex-situ and in situ

V. L. Kas'yanov: State Marine Reserve の紹介

E. A. Shwartz: The WWF priorities in conservation in the Pacific sector of Russia

N. K. Khristoforova: Ecological education at UNESCO Chair of Far East State University

V. M. Neronov: ロシアの自然保護地域(約100)の活動に関する紹介(研修とエコツーリズム志向の活動が主)

Session I : Country Reports on Conditions and Prospects for the Development of National Networks of Biosphere Reserves

China (A. Hebel/UNESCO Beijing Office)、Japan (Y. Aruga)、Mongolia (T. Banzragch)、R Korea (D.-S. Cho)、DPR Korea (S. G. Kim)、Russia (V. M. Neronov)

Han Qunli: Secretary review and report(エコツーリズム、北方四島の自然保護に関する国際協力、Capacity building 等)

9月7日: ウラジオストクから太平洋地理研究所スミチカ科学実習場へバスで移動

Session II : Introduction to Field Evaluation of

Biosphere Reserve

- Previous EABRN BR Field Review and Evaluations by UNESCO
- Main Issues for Sustainable Development of Nature Reserves in Russia
- Capacity Building in Nature Reserves in Russia

9月8日

Session III: Goe/Ecosystem Studies and Monitoring in Biosphere Reserve and at Adjacent Areas

P. Ya. Baklanov: Features of use of natural resources and approaches to sustainable development of the Sikhote-Alin region

ポスター発表(ロシア科学アカデミー極東支部及び Hydrometservice の研究所の研究グループによる)

シホテ・アリン BR 現地視察と詳細な紹介

- History and present status
- Capacity building and nature conservation
- Local participation and development

9月9日:シホテ・アリン BR 現地視察（海岸線から高度 1,200m までの植生分布を中心に視察）

Radio-tracking (tiger, leopard) の説明, 森林の視察
WCS (Wildlife Conservation Society)メンバーによる説明

9月10日:シホテ・アリン BR 現地視察（海岸近くの

漁民・農民放棄地ーサハリンに移住) BR 本部所長の説明

Session IV: Evaluation of Sikhote-Alinsky Biosphere Reserve 参加者全員による質疑・コメントと討論, 勧告と評価のまとめ

9月11日:シホテ・アリン BR からウラジオストクへバスで移動

9月12日:海洋保護区 (Far East State Marine Reserve) の説明

Session V: Presentations and Discussion on Special Topics ① Bilateral and Multilateral Conservation Co-operation , ② Training Program Development & Networking , ③ Ecotourism Development in Biosphere Reserves , ④ Field Evaluation, ⑤ 30 Years Activities of MAB

Session VI: Conclusion of the Meeting

- Chairpersons' summary reports on conclusions and recommendations in different sessions
- Approval of the evaluation of Sikhote-Alinsky Biosphere Reserve

Presentation and Discussion for Future Actions

1. Work plan of EABRN in 2001-2003

Task Forces については韓国で相談する(Kim K.-G.)、IUCN と接触しながら協力的に進める(Choi C.-I.)

2. Next Meeting of EABRN (2003)

EABRN-8 についてはモンゴルで相談してから、年末までに決めたい (韓国 Cheju-do あるいは中国)閉会

9月13日:Excursion to the Far East State Marine Reserve

(あるが ゆうしょう: 東京農業大学)

UNESCO-MAB地域セミナーに参加して

ECOTONE X (Hanoi, Vietnam), 19-23/11/2001

平吹喜彦

MAB事業として毎年1回、東・東南アジアにおいて地域セミナー (East and Southeast Asian Regional Seminar) を開催している。開催国の国内MAB委員会およびジャカルタのユネスコ・地域オフィスとの共催となるこのセミナーは、“自然環境と調和した持続的社会の形成”を推進する行政や大学、研究機関、NGOの実務者、専門家、研究者が集まる国際会議である。この会議は、わが国からの信託基金により1980年代前半より年一回程度の頻度で開催されている。中国・韓国・フィリピン・タ

イ・インドネシア・マレーシア・北朝鮮・モンゴル・ベトナム・カンボジア・ミャンマー・PNG・オーストラリア・ニュージーランド・日本の各国内 MAB 委員会、そして UNESCO/Paris とジャカルタの地域オフィスが正式参加メンバーとなっている。1980年代に MICE (Man's Impact on Coastal Ecosystem) を主題として5回のセミナーが、そして日本における2回の地域セミナー (1989年の BICEM-東京農大、1990年の FRTM-東京水産大) が開催されている。そして、“ECOTONE”を主要議題とし

た地域セミナーは、1992年2月にマレーシアのクアランプールで第1回が開催されて以来、今回で10回目となり、筆者も参加・発表する機会があったので紹介したい。

UNESCO-MAB 地域セミナー“ECOTONE X”は、2001年11月19-23日に、“生態系の評価－東南アジアにおける沿岸生態系の機能・産物・公益機能の評価に向けて “Ecosystem Valuation -for Assessing Functions, Goods and Services of Coastal Ecosystems in Southeast Asia”をテーマとして、同じ UNESCO-MAB 計画(ジャカルタ地域オフィス)が推進している Southeast Asian Biosphere Reserve Network (SeaBRnet)のミーティング: Coastal Biosphere Reserves Cooperation を兼ねて、ハノイで開催された。今回のセミナーにはアジア、オセアニア、欧州など 17ヶ国から約 80名が参加し、日本からは日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会・MAB計画分科会主査の岩槻邦男教授(放送大学)をはじめ、NGOとしてベトナムでマングローブ植林事業を推進している浅野氏など7名が出席している。

19日の8時半に開始されたセミナー第一日目は、Prof. Dr. Dao T. Thi ベトナム国立大学ハノイ校学長をはじめとする、Ass. Prof. Dr. Hoang V. Huay ベトナムMAB国内委員会主査・国家科学技術環境省副大臣、Dr. Peter Bridgewater UNESCO-MAB 計画事務局長 (Paris)などの熱のこもったオープニング挨拶で始まった。以降5日間にわたるセミナーでは、35題におよぶ基調講演、一般講演とポスターセッション発表がなされた。セミナー終了後にベトナム国内 MAB 委員会による1泊2日の日程でエクスカーションが行われた。

初日10時半から3日目の正午近くまで行われた基調講演・一般講演では、“ECOTONE”的中心課題である沿岸域の生物資源・生態系のマネジメントに関する研究成果と各種提案が、2つのセッションを通じて発表された。

Technical Session 1: Ecosystem Valuation and Social Aspects (19 日午前-20 日午前)では、“生物圏保護地域の統括的維持管理”と題する Dr. P. Bridgewater の基調講演の後、ケーススタディーの報告と討議がなされた。ケーススタディーではフィリピン、タイ、ベトナム、中国、マレーシア、オーストラリアなどからマングローブ域を中心とする沿岸域生態系のモニタリング、環境価値評価、社会経済的視点と生態系(環境)プロセスとの連携、エコツーリズムなどについて報告がなされ、活発な議論が展

開された。東南アジア各国、特にベトナムでは、ホーチミンシティに隣接したカンザ地区や北部沿岸の諸都市に隣接した沿岸域において、マングローブ再生プロジェクトが進められている一方で、エビ養殖場やツーリズムのため、さらには工場立地の開発も急速に拡大している現状が大きく取り上げられた。日本企業・NGO等と共同で実施されているマングローブ再生プロジェクトについても、紹介がなされた。また、Dr. R. Baker(オーストラリア)や Ms. Le K. Thoa(ベトナム)などの研究発表に代表されるように、地域住民の生活基盤であるマングローブ等の沿岸域生態系を社会経済的価値と連携させて評価し、自然環境の保全・再生に結び付けていこうとするケーススタディー報告が目立っていた。

20 日午後-21 日午前の Technical Session 2: Coastal Ecotone Management and Biosphere Reserve Networking では、有賀祐勝教授(東京農業大学)により 1994 年から活動が続いている East Asian Biosphere Reserve Network (EABRN) について、岩槻邦男教授(放送大学)により Global Biodiversity Information Facilities (GBIF) について、Dr. H. Thulstrup (UNESCO) により太平洋諸島の MAB Network について、それぞれ環境保全ネットワーク・コラボレーション(協働)に関わる複数の報告がなされた。引き続き、タイ、韓国、マレーシア、中国、インドネシア、バングラデシュ、ミャンマー、ベトナム、そして二宮教授(愛媛大学)のグループなどから事例研究が報告され、熱心な議論がなされた。セッション 1 に引き続いて、ここでも“統括的地域マネジメント(=沿岸域環境政策)”が主要な話題となり、社会経済的価値評価、Community-based 地域マネジメント、環境教育の場としての沿岸域生態系などを中心に活発な議論がかわされた。

なお、ポスターセッションでは、宮城豊彦教授(東北学院大学)、馬場繁幸助教授(琉球大学)、平吹(宮城教育大学)などが、タイやベトナムにおける沿岸生態系の植物生態学的・植生地理学的調査結果を発表した。

セミナー4日目となる 22 日は、午前中に総括的な質疑を行った後、2 グループに分かれてのエクスカーションとなつた。目的地は、どちらもハノイから 150km ほど離れた広大な Red River (ホン川) Delta、および UNESCO・世界遺産指定の Halong 湾である。現在ラムサール条約登録地となっているホン川河口域をマイクロバスと小舟で巡るエクスカーションでは、デルタの微地形に順応した土地

利用や資源循環型の生活を可能にする伝統的ホームガーデン、渡り鳥を通してアジア諸国とネットワーク化された干潟・マングローブ生態系保護区の実態などを目の当たりにすることことができた。沿岸域のマングローブが破壊された後、台風や高潮による海岸線の侵食が急速に進み、沿岸漁業にも影響が出ていること、そのため政府と国内外の NGO などが連携してマングローブ林・マングローブ生態系を再生する事業が精力的に行われていることも見聞した。また、大穀倉地帯であるデルタを潤す水が、縦横に張り巡らされた掘割りによって稻作や舟運に利用されるだけでなく、個々の農家の庭先にまで導かれて家事や水鳥・魚介類の飼育に供されている情景も、1960年代に日本を知る私にとって極めて印象的であった。

世界各地で生物圏保全地域の指定とそれに引き続く自然環境保全活動がたいへん活発で、特に東・東南アジアではこの“ECOTONE”・地域セミナーの開催と連動した新たな指定地の申請も盛んに行われている(タイ国のラノン地区など)。今回のセミナー開催国・ベトナムでは、カンザ生物圏保全地域(Can Gio Mangrove Biosphere Reserve、CMBR)が2000年1月にユネスコで認定されたのを受けており、さらにカチエン生物圏保全地域(Cat Tien Biosphere Reserve、CBR)が2002年の認定をめざして申請する予定となっていることも紹介された。わが国でも、すでに指定されている4箇所に加えて、釧路湿原や白神山地、西表島などが候補に上がっているが指定に向けた動きが具体化していない新生物圏保全地域の指定などを起爆剤として、MAB事業の意義・重要

性が広く認識されて欲しいと切に感じながら、6月のベトナムの地を離れて、帰国の途についた次第である。

(ひらぶき よしひこ、宮城教育大学 教育学部)

追記:本報告は、熱帯生態学会ニュースレター46号(2002.2発行)に掲載したものの再録です。(事務局)

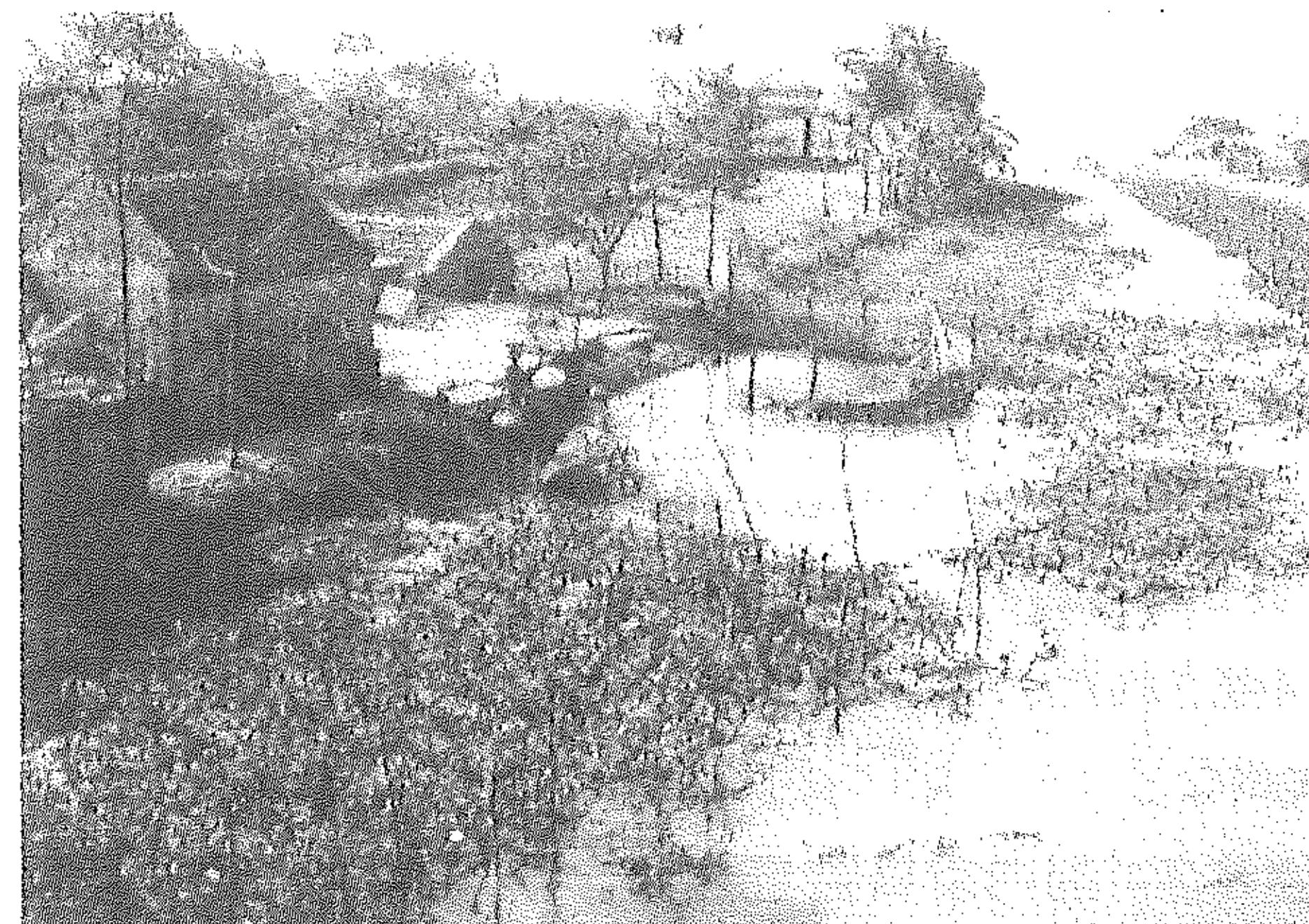


写真 1. エクスカーション: デルタ内の運河と農家.



写真 2. エクスカーション: 生態系保護区に向けてホン川に漕ぎ出す地域セミナー参加者たち.

日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会人間と生物圏 (MAB)計画分科会活動報告(平成13年5月～平成14年12月)

1 アジア・太平洋地域における信仰の山の文化的景観に関する専門家会議

平成13年9月5日～10日、文化庁とユネスコ世界遺産センターが共催して、和歌山県で開催された。会期中、ユネスコMBA Programme Specialist、Miguel Clusener-Godt 氏の講演が行われた。

2 第7回東アジア生物圏保存地域ネットワーク会議(EABRN-7)

平成13年9月6日～13日、ロシアのウラジオストク、スミチカ科学実習場及びシホテ・アリン生物圏保存地域で開催された。

5カ国(韓国、日本、北朝鮮、モンゴル、ロシア)及びユネスコ事務所(ジャカルタ、北京、モスクワ)から56名が参加した。

本会議では「東アジア生物圏保存地域の持続的管理のための能力強化」(Capacity Building for Sustainable Management of East Asian Biosphere Reserves)を中心テーマとして研究発表と話題提供並びに討論が行われた。また、参加者によるシホテ・アリン生物圏保存地域の現地視察が行われ、同地域の保護の現状と学術研究に関する説明を受けると共に管理に関する意見交換と討議並びに評価が行われた。

我が国からの出席者:有賀祐勝(東京農業大学教授)

3 第2回アジア太平洋生物圏保存地域及び同様管理保護地域における再生可能天然資源の持続的利用に関する協力会議(ASPACO-2)

平成13年11月7日～10日、サモアのアピアで開催された。21カ国(アメリカンサモア、オーストラリア、クック諸島、チリ、エクアドル、ミクロネシア連邦、フィジー、仏領ポリネシア、日本、キリバス、マーシャル諸島、ナウル、ニュージーランド、ニウ、パラオ、パプアニューギニア、サモア、ソロモン諸島、トンガ、ツバル、バヌアツ)並びにユネスコ事務所(パリ本部、ジャカルタ、北京、アピア)ほか3団体(SPREP,UNDP,UNEP)から55名が参加した。

本会議では「人と場所:総合的沿岸域保全と人類の持続的発展への太平洋島嶼からのアプローチ」(People and Places: Pacific Island Approaches to Integrated Coastal Conservation and Sustainable Human Development)をテーマとして、生物圏保存地域及びその他の自然保護地域の現状並びに保護活動について各地からの報告と話題提供があり、活発な討論が行われた。また、最終日には Saanapu-Sataoa マングローブ保全地域の現地視察が行われ、地域住民の暖かい歓迎を受けた。なお、本会議は我が国からの信託基金を利用して開催されたものである。

我が国からの出席者:有賀祐勝、馬場繁幸(日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会 MAB 分科会調査委員、琉球大学助教授)

4 東・東南アジア地域セミナー: ECOTONE X

標記セミナーが平成13年11月19日～23日、ベトナムのハノイで開催され、15カ国(オーストラリア、バングラデシュ、カンボジア、カナダ、中国、デンマーク、インドネシア、日本、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、韓国、タイ、ベトナム)、ユネスコ(パリ本部、ジャカルタ、アピア)ほか4団体から83名が参加した。

本セミナーでは、「生態系の評価—東南アジアにおける沿岸生態系の機能・産物・公益機能の評価に向けて」(Ecosystem Valuation — for Assessing Functions, Goods and Services of Coastal Ecosystems in Southeast Asia)を主なテーマに、沿岸生物圏保存地域協力を推進するための東南アジア生物圏保存地域ネットワーク(SeabRnet)の活動を実行に移すための論議を含め、研究発表と情報交換、討論が活発に行われた。

セミナー4日目午後から5日目には2組に分かれて、レッドリバー・デルタ(生物圏保存地域登録申請予定地、現ラムサール条約登録地)とハロン湾(世界自然遺産登録地)への現地視察が行われた。本セミナーは、我が国からの信託基金により開催されたものである。

我が国からの出席者:岩槻邦男(日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会 MAB 分科会主査、放送大学教授)、馬場繁幸、有賀祐勝、二宮生夫(愛媛大学教授)、宮城豊彦(東北学院大学教授)、平吹喜彦(宮城教育大学助教授) 外

5 ①国連大学 パブリックフォーラム「山と私たち」

②国連大学 国際シンポジウム「山岳生態系の保全」

①:平成14年1月31日、②:平成14年2月1日に、国連

大学(東京)で開催された。

第53回国連総会で、2002年を「国際山岳年」と宣言しており、ユネスコも協力している。上記のフォーラム、シンポジウムに日本MBA国内委員会も後援した。

6 人間と生物圏(MAB)計画分科会第18回会議(平成14年3月7日)

岩槻邦男国内委員(MAB分科会主査)により、文部科学省分館において開催され、3月18日から22日までユネスコ本部で開催される第17回MAB国際調整理事会への対応について審議が行われた。事務局から対処方針(案)について説明し、審議の結果、基本的に了承されたが、後日追加コメントを事務局で受け付けることとし、対処方針の作成は最終的には主査に一任された。

7 第17回MAB国際調整理事会

平成14年3月18日～22日、ユネスコ本部(パリ)にて開催。

我が国からの出席者:岩槻邦男、淡路剛久(日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会MBA分科会調査委員、立教大学教授)、大谷圭介(ユネスコ常駐代表部一等書記官)、井村隆(文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長)

ユネスコ本部(パリ)にて開催され、生物圏保存地域(Biosphere Reserve)の在り方及び評価の方法等に検討を加えつつ、MABのビジビリティーの向上を図り様々な視点から議論がかわされた。

8 国連大学国際シンポジウム「人間と海—沿岸環境の保全」(平成14年7月8日～10日)

国連大学、ユネスコ、東京大学海洋研究所、岩手県、島津製作所の主催により、国連大学本部(東京)にて開催された。今回は、ユネスコ本部と国連大学との共同事業への日本ユネスコ国内委員会の協力として、MAB分科会から参加した。特に、第2日目の「沿岸域の管理と持続可能な開発」においては、我が国信託基金によるMABのプロジェクトであるASPACOの紹介がユネスコ本部MAB事務局の担当官からあり、その後、同氏と岩槻委員(MAB分科会主査)が午前のセッションの共同議長を務めた。

日本ユネスコ国内委員会からの出席者:岩槻邦男、馬場繁幸

9 国際山岳年・国際エコツーリズム年記念 山岳エコツーリズム・フェスティバル in 北海道2002(平成14年7月12日～14日)

山岳エコツーリズム・フェスティバル in 北海道2002実行委員会、国際山岳年2002日本委員会、北海道のエコツーリズムを考える会主催、日本ユネスコ国内委員会等後援により、北海道旭川にてシンポジウムが開催された。「大雪山と世界遺産」というテーマでユネスコMAB事務局担当官による講演があり、パネリストに岩槻委員(MAB分科会主査)が参加した。

10 第3回アジア太平洋生物圏保存地域及び同様管理保護地域における再生可能天然資源の持続的利用に関する協力会議(ASPACO-3)

平成14年10月1日～5日、那覇で開催された。

「人間と生物圏」計画 Man and the Biosphere Programmeについて

◎MAB 計画事業は、第16回ユネスコ総会(1970)にて発足が承認された「人間とその環境との相互関係を研究する政府間学際的長期計画」の一環として行われています。

◎よりよい人間manの生存のためにはよりよい生物圏 the biosphere(環境)を維持することが必要です。

◎現在、日本のMAB計画事業は、日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会人間と生物圏(MAB)計画分科会と日本MAB計画委員会を中心に活動をしています。

—MAB 国内委員会 Japanese National Committee for MAB 委員リスト—

(日本ユネスコ国内委員会・自然科学小委員会・人間と生物圏(MAB)計画分科会)

主査 岩槻邦男・放送大学教授

国内委員 位田隆一・京都大学大学院法学研究科教授 中西友子・東京大学大学院農学生命科学研究科教授

調査委員 淡路剛久・立教大学法学部教授 大沢雅彦・東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

川那部浩哉・琵琶湖博物館長 小倉紀雄・東京農工大学大学院農学研究科教授

鈴木継美・東京大学名誉教授 北畠能房・京都大学大学院人間・環境学研究科教授

馬場繁幸・琉球大学農学部助教授 鈴木邦雄・横浜国立大学大学院環境情報研究院長

内藤正明・京都大学大学院工学研究科教授 藤原一繪・横浜国立大学大学院環境情報研究院教授

和田英太郎・総合地球環境学研究所教授

文部科学省(担当官庁) 国際統括官付 浅井孝司国際統括官補佐・井村隆ユネスコ第3係長

関係官庁 文部科学省科学技術・学術政策局政策課資源室、環境省自然環境局自然環境計画課、

外務省文化交流部国際文化協力室、厚生労働省大臣官房国際課、農林水産省総合食

糧局国際部国際協力課、国土交通省総合政策局政策課、日本学術会議学術部学術課

—MAB 計画委員会 Japanese Coordinating Committee for MAB 委員リスト—

岩槻邦男・放送大学教授

有賀祐勝・東京農業大学国際食料情報学部教授

石田朋靖・宇都宮大学農学部教授

大沢雅彦・東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

大島康行・(財)自然環境センター理事長

岡崎正規・東京農工大学大学院生物システム応用科学研究科教授

荻野和彦・滋賀県立大学環境科学部教授

小倉紀雄・東京農工大学大学院農学研究科教授

金子信博・横浜国立大学大学院環境情報研究院教授

北畠能房・京都大学大学院人間・環境学研究科教授

佐々木恵彦・日本大学生物資源学部長

鈴木邦雄・横浜国立大学大学院環境情報研究院長(委員長)

長野敏英・東京農業大学国際食料情報学部教授

村上雄秀・(財)国際生態学センター主席研究員

山口征矢・東京水産大学海洋環境学科教授

和田英太郎・総合地球環境学研究所教授

◇詳細・お問い合わせ

日本ユネスコ国内委員会・自然科学小委員会・人間と生物圏(MAB)計画分科会

—MAB 国内委員会 Japanese National Committee for MAB—

事務局: 文部科学省国際統括官付ユネスコ第3係 〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関3-2-2

電話: 03-5253-4111 (内線2557)、FAX: 03-5511-0845

MAB 計画委員会 Japanese Coordinating Committee for MAB

事務局: 横浜国立大学大学院環境情報研究院技術経営資料室 〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-7

電話とFAX: 045-339-3719

E-mail: mab-jpn@ynu.ac.jp

ニュースレターに関するお問い合わせは、下記までお願いします。

InfoMAB MAB, Japan News Letter No.29 2003.3.10

編集:MAB計画委員会 Japanese Coordinating Committee for MAB

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-7

横浜国立大学大学院環境情報研究院技術経営資料室

発行:MAB国内委員会 Japanese National Committee for MAB

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関3-2-2

文部科学省国際統括官付ユネスコ第3係

<http://www.mext.go.jp/english/topics/unesco/mab-j/top01.htm>

MAB 日本委員会が協力したイベントなど

国内で開催される MAB 関連の事業に、後援等のかたちで、貢献した事業があった。

7月中旬に、国連大学で沿岸域生態学に関するシンポジウムが企画され、日本MAB国内委員会に後援を要請された。積極的に後援することにし、開会式で挨拶を申し上げ、関連する日本MAB内委員会等の活動を紹介するなどのかたちで参画した。

7月下旬に北海道で、国連山岳年、国連エコツーリズム年に協賛する大規模なシンポジウムが企画され、これにも MAB の参画が要請された。シンポジウムの1つでは、大雪山域を世界遺産に指定することを模索するものがあったが、岩槻はこのシンポジウムのパネリストとして参画し、企画の盛り上げに協力した。後援者として参画できたのは限られた部分だったが、日本MAB国内委員会の活動を紹介する機会としては有効であった。

MAB 日本委員会の抱える問題

2002年の活動を通じて、残念ながら、日本MAB国内委員会等による日本のMAB活動は必ずしも活発だったという評価はできないように思われる。これには、MAB の活動に参画する人材のリクルー

トが難しいことが根本的な問題としてあげられる。

MAB の活動の中心に生物圏保存地域の設定とその保存活動があげられるが、日本では1981年に4件の保存地域が設定されて以来、その後付け調査の集成が一度行なわれたものの、その後は保存状況の評価なども十分行なわれないままの状態が続いている。この問題は、日本MAB国内委員会独自で取り組めるもの保存・保全活動が、環境省や文化庁の所管の部分を含んでいることから、日本の取り組みとして理解される状況になっていない面もあり、環境省や文化庁の活動と協力しながら、MAB として何をやるべきかを詰め、実行していくことが必要である。MAB の課題としては、基礎的研究の推進が訴えられているが、そのためには研究者のリクルートが、さらに、そのためには研究費の獲得が必要条件となる。新しい生物圏保存地域の設定なども視野に収めて、MAB 本来の活動が推進されるように、検討を重ねたいものである。生物圏保存地域そのものが日本で認知度が低いという認識から、雑誌「プランタ」に生物圏保存域の紹介記事の連載を始め、2002年に3回掲載した。

(いわつき くにお 日本MAB国内委員会
放送大学教授)

第17回国際調整理事会概要報告

井 村 隆

標記会議が2002年3月18日から22日までユネスコ本部で開催された。我が国からは岩槻邦男・日本ユネスコ国内委員会委員(放送大学教授)、淡路剛久・日本ユネスコ国内委員会調査委員(立教大学教授)、大谷圭介・ユネスコ常駐代表部一等書記官と文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長の井村 隆が参加した。

主要議事について

(1)議長、副議長選挙において、我が国(岩槻委員)は、アジア太平洋地域からの副議長に選出された。(任期は4年)

(2)前回(第16回)理事会以降(2000年11月~2002年2月)の活動について、事務局から以下の報告があった。

① 第31回ユネスコ総会において、2002-2007中期計画(31C/4)では、普遍性、多様性の保護及び知識の共有等が掲げられ、自然科学セクターでは、2002-2003事業計画予算(31C/5)において、「水資源及びそれに関係する生態系」が最優先分野となっており、MAB と IHP の共同事業や5政府間事業の理事会議長の声明にもある通り、各プログラム間で学際的アプローチを実施していくことや生物多様性条約、ラムサール条約などの協力について説明があった。

② 昨年の第 31 回ユネスコ総会において採択された「文化的多様性世界宣言」について、全セクターで対応することであり、MAB としても生物圏保存地域の目的やネットワークを通じて対応したい。

③ 第 31 回ユネスコ総会第 3 委員会において、2002-2003 事業計画予算(31C/5)に対して MAB に関する決議案としては、①GBIF の技術的支援によるキャパシティービルディングについて(エジプト)、②MAB/IHP のジョイントプロジェクトに、生物圏保存地域をパイロットサイトとすることについて(南ア)があった。

④ ビューローにおいて、新たに生物圏保存地域に指定されたものは、22ヶ国から52箇所、そのうち国境を跨ぐものは、ベナン・ブルキナファソ、ドイツ・フランスである。

⑤ レビューについては、昨年9月のビューローで提言されたもので、地域ネットワークは、効果的である。MAB の評価の最終結果はまだあるが、サマリーを提出する。

(3) 生物圏保存地域世界ネットワーク

① 多くの国から生物圏保存地域に関する MAB の活動の重要性が述べられ、セビリア戦略は生物圏保存地域コンセプトの実施のための主要なツールであると再三示された。また、ドイツから、重要なファクターとして生物圏保存地域のサイズについて言及があった。幾つかの国から、国境を跨いだ生物圏保存地域は平和維持の分野で、近隣国との国際協力のためのモニターとしても特に注目された。

② 指定後 10 年以上経過した生物圏保存地域の定期レビューに対して、検討及び決定が求められていた事項に対する結果は、以下のとおり。

(a) 基準に合致しない生物圏保存地域の”red list”作成について：理事会では、非常にネガティブな印象を与えることに抵抗があるとして、反対意見があった反面、red list は作成せず、定期レビューの結果、問題のある生物圏保存地域については、MABNet に機械的に表示することがきまった。

(b) 生物圏保存地域のネットワークにおいて”associated sites”的カテゴリーを設けることについて：生物圏保存地域としての条件をすべて満たしてはいないが、地域のネットワークにおける研究やモニタリング活動に参加可能なサイトを Network-Associated sites として、新たなカテゴリーを設けることについて、理事会では混乱を招くとの理由で否決された。

(c) 生物圏保存地域ネットワークのためのより法的拘束力のある枠組みの徹底的な研究について：枠組みを設けることにより、各国の法制下にある状況や財政問題も含めて多くの困難な事柄が考えられることから、理事会ではこれを否決し、ビューローにおいて、再度検討することとなった。

(d) オブザーバー参加の英国代表から、生物圏保存地域の定期レビューの結果、生物圏保存地域の条件を満たさないものについて、その指定を解除することを求める決定をしたことが報告され、理事会としては、英國の定期レビューに対する前向きな対応に賛辞を送った。

(4) MAB 国内委員会

多くの国から、各国における MAB 計画の実施のために MAB 国内委員会が重要であることが述べられ、幾つかの国から、MAB 計画の多面的学際性を十分に発揮するために MAB 国内委員会は機能すべきであることが発言された。また、今年 2002 年は、MAB 計画 30 周年を迎えるところ、各国における記念事業についても報告があり、理事会としては、各国の MAB 国内委員会の活動を奨励した。

MAB ICC 17 に出席して(岩槻団長所感から)

2002 年 3 月 18~22 日にパリのユネスコ本部で開催された第 17 回 MAB 国際調整理事会に出席した。会議では、冒頭で Asia-Pacific 地域代表として Bureau メンバーに選出され、今期は理事会と Bureau で貢献することになった。

理事会の agenda は、議長、事務局長の活動報告、各国・各地域からの報告、関連機構などからの報告に始まり、MAB の事業の詳細について事務局報告に基づいて議論が進められた。私にとって、今回 MAB の活動の全貌に触れるのははじめての機会だったので、文書等で学んでいたのとは違う視点で事実が理解され大変有益だった。今後、MAB 全体の活動に貢献すると同時に、この知見を今後の日本国内委員会の活動に生かすよう努力したい。一方、はじめて参加する立場で、理事会の進め方などについて考えるところがあり、今後の活動を通じて理事会、事務局の活動についても建設的な改善案を提案することを考えたい。

理事会そのものと並行して、参加者との意見交換を行うよい機会でもあった。事務局との間で、ASPACO の計

画を詰めたり、アジア地域からの参加国代表と、地域活動をどう発展させるかを論じる機会をつくれたのも、理事会の副産物として貴重であった。

MABのビジビリティについては、この理事会でも、さまざまな視点から議論がかわされた。Biosphere Reserve の在り方もそのラインで問題であるが、一方では Seville +5 で評価の方法等に検討を加えながら、新 Biosphere Reserve の指定も積極的に行なわれている。地球上に 400 を超える Biosphere Reserve をもちろん、私たちの地球が一向に住みやすい状況をもたらさない現実にはあらためて注目すべきである。

日本の活動をMAB全体のうちに位置付けるとすれば、10回を重ねた ECOTONE は、これまでの努力で当該地域の MAB family の構築により結果をもたらしたと評価できる。このグループが、ECOTONE phase II で有益な貢献が行えるように、IHP などとの協力も視野に収めた淡水域への展開を図るべき時と理解され、その行動が UNESCO の掲げる活動目標に合致するように、中

期的な活動方針の転換を図る必要があるだろう。

日本MAB国内委員会はこれまでMABの活動に注目はして来たものの、委員会として積極的に活動に参画して来たとはいえない。これは、委員会自体が活動資金をもたず、事務局を確保していないボランタリーな組織に過ぎない現実から来る弱さでもある。MABの活動にどこまで精力を注ぐかはさらに検討を要することはあるが、UNESCO のビジビリティの向上に資することを含め、MAB国内委員会として貢献できる課題を構築し、具体的な活動を推進していきたい。とりあえず、日本とアジアの Biosphere Reserve に改めて注目し、日本とアジアにおける問題点を整理することから手をつけてみたい。SeaBRNet の活動を具体化することのような地道な活動から始めるべきだろう。ASPACO, ECOTONE, EABRN など、アジア・太平洋地域のMABの活動にはこれまでと同様積極的に貢献を続けたい。

(いむら たかし 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長)

MAB の新プロジェクト ASPACO

第1回会議：インドネシア・バリ(2001年2月19—21日)

第2回会議：サモア・アピア(2001年11月7—10日)

有 賀 祐 勝

アスパコ(ASPACO)は Asia Pacific Co-operation for the Sustainable Use of Renewable Natural Resources in Biosphere Reserves and Similarly Managed Area の省略である。これは世界科学会議(1999年6月ブダペストで開催)のフォローアップとして設定された MAB の新プロジェクトで、日本からユネスコに拠出される基金によって実施されるものである。その最終目標は、沿岸生態系の管理における発展途上国の資質向上にある。

第1回会議は、ユネスコ生態科学部とユネスコ・ジャカルタ事務所の世話をによりインドネシアのバリ島で開催され、プロジェクト全体の実施計画が検討された。第2回会議は、ユネスコ・アピア事務所の世話をによりサモアのアピアで開催され、People and Places: Pacific island approaches to integrated

coastal conservation and sustainable human development のテーマの下に活動報告と討議が行われた。

第1回 ASPACO 会議

出席者： 有賀祐勝(日本 MAB), Zafar Adeel(国連大学), Miguel Clüsner-Godt(ユネスコ生態科学部), Han Qunli(ユネスコ・ジャカルタ事務所), Axel Hebel(ユネスコ・北京事務所), Aprilani Soegiarto (ISME), Hans Thulstrup(ユネスコ・アピア事務所), Enis Widjanarti(ユネスコ・ジャカルタ事務所)。

2001年2月19日

開会： ユネスコ/MAB 事務局及び日本 MAB からの挨拶、日程の紹介、参加者の紹介。セッション

I: M. Clüsner-Godt による ASPACO の概念と実施枠組みに関する説明、Z. Adeel による国連大学の沿岸・海洋環境保護並びに天然資源持続的利用に関する活動の紹介、A. Soegiarto による ISME の関連プロジェクト並びに研究活動に関する紹介があり、プロジェクト分野選定の基準、プロジェクト運営と研究機関の協力、インターネット・グループを含む情報交換の諸問題、成果出版に関する方針と準備、予算問題と会計報告などについて討論が行われた。

セッションII: アピア事務所、北京事務所、モンテビデオ事務所、ジャカルタ事務所、ISME、国連大学からそれぞれ ASPACO 野外プロジェクトに関するアイディアと提案が披露され、討論が行われた。

2001年2月20日

特定課題に関する討論、特定プロジェクトに関する検討作業、最終討論と総括が行われた。

2001年2月21日

野外エクスカーション。

前述のように、この会議では ASPACO プロジェクトに参加すべき研究機関が協力してこのプロジェクトの詳細な計画と実施に関する準備を整えることを目指しており、ガイドラインと実施計画をまとめるためのものであった。(1) ASPACO の概念とその実施枠組み、(2) プロジェクト分野選定のための基準、(3) プロジェクトの調整と研究機関の協力、(4) 成果出版に関する方針と準備、(5) 活動内容と実施場所などについて検討が行われ、その活動の枠組みを表1のようにまとめられた。

この会議では、参加者の沿岸生態系管理に関する経験について有意義な意見交換が行われた。また、インドネシア森林局の管理下にある JICA 援助によるマングローブ・センター訪問を含むフィールド・トリップは、バリ島の生態系の概要を理解するのに有意義であった。第2回 ASPACO 会議をサモアで開催することを決めた。

第2回 ASPACO 会議

出席者： アメリカンサモア（1名）、オーストラリ

ア（1名）、クック島（1名）、チリー（1名）、エクアドル（1名）、ミクロネシア（2名）、フィジー（1名）、仮領ポリネシア（1名）、日本（3名）、有賀祐勝、馬場繁幸、Zafar Adeel）、キリバス（1名）、マーシャル諸島（1名）、ナウル（1名）、ニュージーランド（1名）、ニウ（1名）、パラオ（1名）、パプアニューギニア（1名）、サモア（12名）、ソロモン諸島（2名）、トンガ（1名）、ツバル（1名）、バヌアツ（2名）、南太平洋地域環境計画(SPREP)(8名)、国連開発計画(UNDP)(3名)、国連環境計画(UNEP)(1名)、ユネスコ（3名）、ユネスコ・アピア事務所（3名）（合計55名）。

2001年11月7日

開会式

Keynote speech 1 by M. Clüsener-Godt (UNESCO-MAB): *ASPACO in the Pacific Region: Preservation of natural coastal resources for the benefit of their local populations. Meeting objectives and expected outcomes*

Keynote speech 2 by Zafar Adeel (UNU, Presented by M. Clüsener-Godt): *UNU in the Pacific region*

Case study presentation by Jim Muldoon: *Use of Biosphere Reserves to achieve biodiversity conservation and sustainable use – an Australian case study*

The role of Biosphere Reserves in the conservation and sustainable use of coastal areas in the Pacific: Case study presentations from; Galapagos, Ecuador by Adriana Salcedo Juan Fernández, Chile by Hugo Arancibia UNEP-GEF National Biosafety Frameworks Project by Nizar Mohamed

2001年11月8日

Keynote speech 3 by Shigeyuki Baba: *ISME in the Pacific region*

Case study presentations from the Pacific: Conservation and sustainable use of coastal areas in the Pacific states:

Papua New Guinea by Vagi Genorupa
Palau by Alma Ridep-Morris
Samoa by Ioane Etuale
Tonga by Uilou Samani
New Zealand by Johanna Rosier
American Samoa by Malelega Tuiolosega

Country statements:*Introduction by Losefatu Reti**Vanuatu by Charles Vatu**Fiji by Manasa Sovaki**FSM by William Kostka**Kiribati by Tessie Eria Lambourne**Tuvalu by Mataio Tekinene**Solomon Islands by Moses Biliki**Nauru by Roxen Agadio*

2001年11月9日

Country statements:*Niue by Fili Rechmond-Rex**Cook Islands by I'o Tuakeu-Lindsay*パネル討論 :

Issues and Options for Biosphere Reserves in the Pacific (SPREP, UNESCO, UNDP, ISME, MAB-Japan)

全体討論 :

Issues and Options for Biosphere Reserves in the Pacific

Opportunities for regional co-operation under the overall philosophy of the MAB

Programme and with support from ASPACO

Presentation of a draft statement by M. Clüsener-Godt

2001年11月10日

Field trip to Saanapu-Sataoa mangrove conservation area, Upolu Island, Samoa

アジア・太平洋地域の島嶼生態系を中心として、この地域の沿岸生態系を保護しつつ再生可能な天然資源を有効利用するための共同研究を目指して、各地から集った環境管理者・研究者・地域住民代表など55名が、この地域が抱える諸問題を生物圏保存地域の有効活用による解決方策などを討議した。ユ

ネスコ・MABとASPACOプロジェクトが目指す活動についての説明の後、それぞれの参加者から関係している保護地域の活動と問題点についての報告があり、今後いかに協力すべきか、またどのような協力が可能であるかについて討議が行われた。また、生物圏保存地域の世界ネットワークを活用した太平洋地域における生物多様性の保護並びに天然資源総合管理についても話し合いが行われた。

この会議では、太平洋地域におけるMABの活動に関する論議のみでなく、この地域において進行中または計画中の自然保護並びに沿岸域総合管理に関連する諸活動－特に南太平洋生物多様性保護計画（SPBCP, South Pacific Biodiversity Conservation Programme）やSPREP（South Pacific Regional Environmental Programme）によるUNDP-GEFプロジェクト（United Nations Development Programme-Global Environment Facility Project）などとの協力体制の確立に関しても、できる限り詳細に論議し、協力体制を確立することを狙っていた。また、この地域の国家間協力と地域間協力に加えて、太平洋・ガラパゴス諸島やファンフェルナンデス列島の生物圏保存地域の代表者と南部・中部・北部太平洋地域のSPREP加盟国の環境保護団体や天然資源管理局の代表者とが一堂に会して協力体制を確立すること、更にはラテンアメリカ太平洋地域の代表者とSPREP加盟国の代表者との連携を拡大することをも目指していた。話し合いと意見・情報交換を通して、太平洋地域の生物多様性保護への貢献並びに最も適切で効果的な方法で太平洋地域島嶼諸国に恩恵をもたらそうとするMAB活動への理解も増進された。

このような観点から、会議の最後にまとめられた相互協力と情報交換等の推進に関する参加者のコメント（本文末に添付）は、この会議の重要な成果であり、この地域におけるMAB活動拠点のネットワーク化の確立が大いに期待される。

第1回及び第2回ASPACO会議の詳細は、下記の報告書を参照されたい。

- (1) *Report on The First Meeting of Asia Pacific Co-operation for the Sustainable Use of Renewable Natural Resources in Biosphere*

Reserves and Similarly Managed Areas (ASPACO), 19-20 February 2001, Nusa Dua, Bali, Indonesia. UNESCO. 18+24pp.

(2) *Report on The Second Meeting of ASPACO. People and Places: Pacific island approaches to*

integrated coastal conservation and sustainable human development, 7-10 November 2001, Apia, Samoa. UNESCO. 94+11pp.

(あるが ゆうしょう、東京農業大学)

表1 第1回会議でまとめられたASPACO活動の枠組み

Activity	East/Southeast Asia	Pacific	Latin America
	Jakarta Office Beijing Office	Apia Office	Montevideo Office
<u>Projects:</u>	<u>Sites:</u>	<u>Sites:</u>	<u>Sites:</u>
<ul style="list-style-type: none"> • Capacity building • Training • Applied research • Socio-economic studies • Case studies • (success story) 	<ul style="list-style-type: none"> • Siberut (RI) • Can Gio (VN) • Mahakam (RI) • Shanko (PRC) • Ranong (TH) • DMZ (DPRK/ROK) 	<ul style="list-style-type: none"> • Savaii (SAM) • Ngaremedu (PAL) • More to be identified 	<ul style="list-style-type: none"> • Galapagos (Ecua) • Baja California (MX)
<u>Training:</u>	<ul style="list-style-type: none"> • Training workshop • Fellowship 	Inate training workshop	Costa Rica (UCI)
	<ul style="list-style-type: none"> • Anamalai (UNU-UNESCO International training worksop • Iriomote/ISME • Young researchers and managers' award (PRC/RI as test case) 		
<u>Networking</u>	ECOTONE, EABRN, SeaBRnet	SPBCP-SPREP	IberoMAB CYTED
<u>Inter-regional Activities:</u>			
<ul style="list-style-type: none"> • Meetings • Threat assessment • Fellowship 	<ul style="list-style-type: none"> • Apia (September 2001) • ECOTONE X -Hanoi (November 201) • UNU-WRI Threats survey • Inter-project exchange 	<ul style="list-style-type: none"> • Apia (September 2001) • ECOTONE X -Hanoi (November 2001) • UNU-WRI Threat survey • Inter-project exchange 	<ul style="list-style-type: none"> • Apia (September 2001)
<u>Dissemination:</u>			
<ul style="list-style-type: none"> • Reports • Internet-based • Research/peer review 	<ul style="list-style-type: none"> • Reports to donor • Project leaflet • Proceedings • Book on project conclusion • Policy briefs • SC e-mail group • Project web site • GLOMIS & LandBase links 	<ul style="list-style-type: none"> • Reports to donor • Project leaflet • Proceedings • Book on project conclusion • Policy briefs • SC e-mail group • Project web site • GLOMIS & LandBase links 	<ul style="list-style-type: none"> • Reports to donor • Project leaflet • Proceedings • Book on project conclusion • Policy briefs • SC e-mail group • Project web site • GLOMIS & LandBase links

アジア・太平洋でのプロジェクト“ASPACO”

馬場繁幸

1 ASPASOについて

プロジェクトの名称を省略して ASPACO と呼ぶにはそれなりの理由があると思っている。その一番の理由はプロジェクトの名称が長いからであろう。ASPACO の正式名称は“Asia Pacific Cooperation for the Sustainable Use of Renewable Natural Resources in Biosphere Reserves and Similarly Managed Areas”であるが、誰もが ASPACO project と呼んでいる。

このプロジェクトのフレームワーク作りは、UNESCO と国連大学(the United Nations University、以下 UNU と省略)、それに私がボランティアで事務局長をしている国際マングローブ生態系協会(International Society for Mangrove Ecosystems、以下 ISME と省略)が 2000 年 3 月 26 日～3月 30 日に沖縄県那覇市で開催したマングローブの保全に関する国際ワークショップ(UNESCO/UNU/ISME International Workshop on Asia-Pacific Co-operation on Research for Conservation of Mangroves)の時に行われた(写真1)。

ワークショップの開催期間中に UNESCO-MAB のミケール・クリスナゴッド博士を中心として国連大学の担当者(ザッファー・アディール博士)、ISME からは会長であるアリラニ・ソエギアルト博士と私等が集まり太平洋島嶼諸国が直面している環境問題を整理し、新しいプロジェクトについていくつかの方向性を話し合った。

その議論を踏まえクリスナゴッド博士がパリに帰国後、project proposal を書き上げ、UNESCO に提案し、わが国政府が資金拠出(U\$1,113,050)したのが ASPACO プロジェクトと私は理解している。

以上のような経緯もあり、この ASPACO プロジェクトが UNESCO-MAB のプロジェクトとして 2000 年末に開始された時から、UNU と ISME はそのネットワークをフルに活用して種々の形で協力をやってきている。その一つの例としては、第1回目の会議が ISME の会長の国、インドネシア共和国バリ島のホテルメリアで 2001 年 2 月 19 日～21 日の 3 日間(最終日はエクスカーション)にわたって開催されたことにある。ISME 会長の国での開催といつても、開催の主体は UNESCO と UNESCO ジャカルタ事務所、日本ユネスコ国内委員会、UNESCO 北京事務所と

UNESCO アピア事務所であり、それに ISME と UNU が協力した。幾度もクリスナゴッド博士やアデール博士に参加するようにと勧められたが、この時期は大学の卒業論文、修士論文の発表会や判定会議等の日程が入っていたため、大変残念ながら私は参加できなかった。会議の進め方について、両博士がメールを送ってくれたのである程度状況は理解できた。私の理解では「出来るだけ多くの参加者を呼びたいが、参加者が多いと議論が白熱し過ぎて、時として結論を出すことが難しくなるので、少數精鋭したい」ということのようであった。私は参加していないのであくまでも推測に過ぎないが、最終的には第1回目の会議への出席者を限定し、十分に議論を行い「ASPACO プロジェクトの目的と方向性の確認、事業実施のフレームワーク作り、プロジェクトの印刷物の種類とその内容、これからの活動とその対象とされる場所と時期」を議論することが主眼とされたような気がしている。

第1回会議報告書に基づく会議の主題とその結論の概略は以下の通りである(UNESCO, 2001)。

1)今後の協力について

アジア・太平洋地域、とりわけ太平洋島嶼諸国との協力が必要である。また、現在アジア・太平洋地域で推進されているプロジェクトや活発な活動を行っている組織と協力する。国際的あるいは地域的な会議やイベントなどの必要情報は UNESCO 本部が web-site で提供する。

2)2001 年アピアでの会議について

過去 20 年間 UNESCO-MAB は太平洋地域で十分な活動の展開でかったので、ASPACO の太平洋地域での立ち上げと併せて太平洋地域での UNESCO-MAB の活動も推進する。次回アピアでの会議にはフランス領ポリネシア、ハワイ(アメリカ合衆国)、エクアドルのガラパゴス諸島、チリのファンフェルナンデス諸島からの参加も考慮する。MAB だけではなく UNU や ISME も積極的に協力し、太平洋地域での生物多様性保全や天然資源の持続可能な管理に関する事業を推進する。バリの会議では十分に今後のアジア・太平洋地域、とりわけ太平洋地域については議論ができなかつたので継続審議とする。

3)ECOTONE との協力について

東南アジアでは UNESCO-MAB の ECOTONE プログ

ラムによって 10 年以上にわたり研究者のネットワークが形成されてきた。2001 年 11 月にベトナムのハノイで開催される ECOTON X では ASPACO と今後どのように協力するかのセッションを設け、UNESCO-MAB が積極的に太平洋島嶼諸国の沿岸生態系保全の事業を推進する。

4)ASPACO のテーマについて

ASPACO プロジェクトを展開するにあたって活動にふさわしいテーマ(活動に併せてのキャッチコピーみたいなもの)を掲げておくと、活動が推進しやすいのではとの提案がなされたが、時間切れで十分に議論できなかった。そのようなテーマの例としては 2000 年 3 月に沖縄で開催された UNESCO/UNU/ISME の国際会議の時に話題となつた幾つかが紹介された—マングローブ生態系に及ぼす市場の影響、導入及び移入種の影響、放棄されたエビ養殖池の再生、人的活動の影響、持続可能な管理、伝統的な利用、地域住民の参加とパートナーシップ、国境を越えた保全のあり方、エコツーリズムなど。

5)人材育成について

人材育成については中国、ベトナム、インドネシアなど国情や研究者、行政担当者、地域、地域社会などのそれぞれのレベルに併せた人材育成が必要とされた。

6)ASPACO の活動

UNESCO 事務所の中で極東を担当する北京事務所、東南アジアを担当するジャカルタ事務所、太平洋地域を担当するアピア事務所、中南米を担当するモンテビデオ事務所の業務分担が議論された(表3)。

7)今後の事業の進め方と予算の割り振り

- ジャカルタ事務所の役割は、第1回会議のレポートを作成し、それには沖縄での 2000 年の UNESCO/UNU/ISME 国際会議のリコメンデーションも掲載すること。
- 会議の出席者は、ASPACO 事業を進展させるためにふさわしい人や組織(機関)を探すとともに、寄付金を集めること。
- 2001 年の太平洋島嶼諸国での会議に約 30,000 米ドルを予定すること。
- Project proposal はじめ必要な印刷を行うこと、必要な予算を確保すること。また、印刷物の費用軽減のため ECOTONE との共同印刷物も考慮すること。

2 月 21 日にはエクスカーションで JICA(国際協力事業団)のマングローブプロジェクト「インドネシア国マングローブ林資源保全現地開発実証調査」の事業サイトを見学した。当該プロジェクトは 1992 年 12 月にはじまり 1999 年 11 月に終了したが、バリ島の養殖池放棄地やロンボ

ック島の伐採跡地への植林技術の開発など、多くの貴重な成果を残したプロジェクトである(写真2, 3)。現在、新しいプロジェクト、すなわちインドネシア国内のマングローブに関する研修事業を立ち上げていることから、JICA やインドネシアの関係部局からは、これからも有効に利用されるプロジェクトサイトと期待されている。

2 第2回アピアでの会議

1) 遠かったアピア

バリ島での第1回会議を踏まえ第2回目の会議は 2001 年 11 月 7 日～11 月 10 日までサモアのアピアで開催された。わが国からサモアの首都アピアまではフィジーを経由するか、ニュージーランドのオークランドを経由することになる。ちなみに私の航空券は UNESCO のアピア事務所が発券の指示をし、日本航空沖縄那覇支店が発行したニュージーランド航空の航空券であった。

11 月 5 日(月曜日)午前 10 時から東京で JICA の会議があったので、11 月 4 日(日曜日)に沖縄を出発したが、その前々日の金曜日(11 月 2 日)、オークランドからアピアまでの航空便の時間が変更になり、私の便はオークランドに到着した時にはすでにアピア行きの航空便は出発してしまうので 11 月 4 日夕方の便で成田を発つてもらいたいとメールが入った。しかし、11 月 5 日午前 10 時の東京での JICA の会議出席をキャンセルするわけにいかない。でも、オークランドに着いた時にアピア行きの航空便がないのであれば、早く行くこともないので出発を 1 日遅らせようと思った。そんなことを考えて、日本航空に電話し出発便の変更申し込みたら「ニュージーランド航空に問い合わせて欲しい」、ニュージーランド航空に電話したら「発券した日本航空で変更して欲しい」とのことであった。そんな電話でのやり取りを 2 つの航空会社と幾度かし、最終的には「発券を依頼したサモアの指示がなければ変更しない」ということになった。サモアにも幾度か電話をしたが誰も電話に出なかつた。よく考えてみたら日本では 11 月 5 日の月曜日であったが、サモアは日付変更線の東に位置しているので、まだ 11 月 4 日の日曜日であった。日曜日であれば UNESCO アピア事務所はお休み、サモアの旅行代理店もお休み。結局、航空便の変更はできず予定通り 11 月 5 日午後 6 時半成田発のニュージーランド行きに乗った。11 月 6 日昼にクリストチャーチを経由してオークランドに着いたが、やはりアピア行